

# 資料館だより

第 27 号

平成 9 年 ( 1 9 9 7 )  
8 月 15 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館 〒208 武蔵村山市本町5-21-1 TEL 0425(60)6620



シジュウカラ



メジロ



アオゲラ



ルリビタキ



ジョウビタキ

写真撮影 村山俊彰 氏

## 写真展 「 狭 山 丘 陵 の 鳥 」

期間 平成 9 年 ( 1 9 9 7 ) 7 月 2 7 日 ( 日 ) ~ 8 月 3 1 日 ( 日 )

# トウロマチ（灯笼祭）の世界

期間 平成9年(1997) 6月29日(日)～9月14日(日)

昭和30年前後まで市内各地の神社の祭礼で子供たちが作ったトウロ（村山ことば：灯笼のこと）が飾られました。この灯笼は、広く地口行灯じくちあんどんと言われており、ダジャレ（駄洒落）やひょうきんな絵が描かれています。灯笼の絵は絵の上手な人に

描いてもらったり、それらをお手本に子供たちが写したりしたそうです。ダジャレはことわざなどを少しもじってユーモラスなものが多いのですが、中にはブラックユーモアと思われるものや意味の解明できないものもあります。



かなわぬ時の

かにだのみ

清水元治氏

再現画



銘酒めいしゅがすきで

赤いわし

豊泉林七氏寄贈

大正時代作成

田でくうめしも

すきずき

清水元治氏

再現画



恵比寿えびす

大根喰だいこんくふ

清水元治氏

再現画



竹の内きつね

清水元治氏

再現画

## 花粉と考古学

パレオ・ラボ 吉川 昌伸

春先にスギ花粉がアレルギー源として大きな社会問題になっています。この様に違った意味で注目されている花粉ですが、植物にとっては種族保持のため生産されている極めて重要な器官です。しかし、現実的には一部の花粉のみが本来の目的を全うし、大半はいわば落ちこぼれともいえるべきものです。この落ちこぼれの花粉の一部は化石として残り、今我々に過去の多くの情報をもたらしてくれる有用な花粉として蘇っています。

花粉は、1個の大きさが0.02~0.1mm程度とかなり小さい粒子です。しかし、生産量は種類や受粉様式により異なりますが、例えば風媒花のスギでは約1個に約3300、1花序で約40万個と膨大な個数になります。つまり、多種の植物に由来する膨大な量の花粉が空中に浮遊していることとなります。

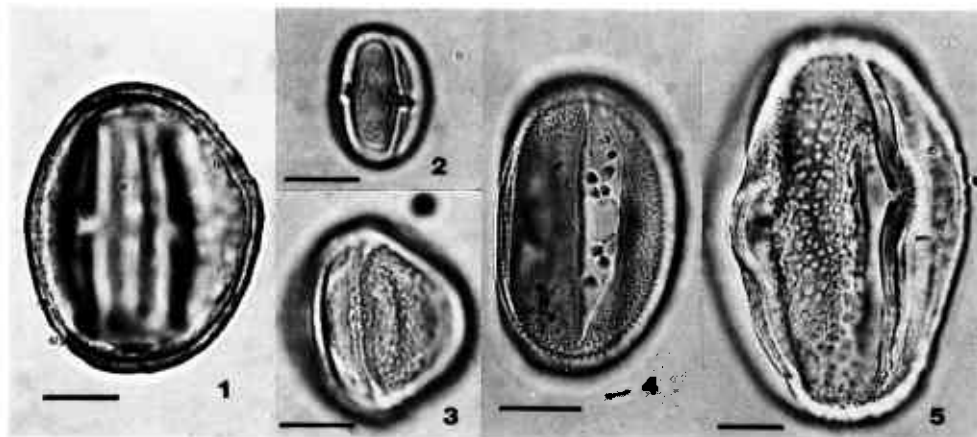
泥炭や粘土から化石花粉を抽出し、その種類や産状を調べることにより植生や環境変遷史を解明する方法が花粉分析です。考古学では花粉分析は遺跡周辺の植物群やその植生変遷史を明らかにすることにより、人間と植物のかかわり、つまり人間が環境とどのようにかかわり、さらに変化させていったのかを明らかにすることを目的としています。関東地方では多くの低湿地遺跡で花粉分析が行われていますが、ここでは縄文時代後・晩期（約3950~2150年前）以降の東京周辺の古植生と生業について紹介します。

縄文時代後・晩期の植生は、狭山丘陵北部ではカヤ、モミなどの針葉樹、アサダ、イヌシデ、ア

カガシ亜属、コナラ亜属、ケヤキ、ムクノキ、トチノキ、トネリコ属、カエデ属などの落葉広葉樹と常緑広葉樹であったと考えられています（所沢市お伊勢山遺跡）。練馬区周辺の武蔵野台地では、コナラ亜属が卓越し、クリやケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属などからなる落葉広葉樹林が形成され、常緑広葉樹をほとんど伴わなかったようです。東京湾岸の淀橋台では、縄文時代後期にはコナラ亜属を主としクリ属などからなる落葉広葉樹林が広がっていましたが、晩期にはコナラ亜属が衰退、常緑広葉樹のアカガシ亜属が増加し照葉樹林が形成されていたようです。このように縄文時代後・晩期には、東京湾沿岸地域の淀橋台や狭山丘陵では照葉樹林が発達していましたが、武蔵野台地では落葉広葉樹林が優勢で、照葉樹林の発達が貧弱であったことが知られています。また、この時期のクリやトチノキについては栽培されていた可能性が考えられています。

弥生時代以降では針葉樹のスギが増加し、落葉広葉樹のコナラ亜属や照葉樹林のアカガシ亜属と伴って主要な森林構成要素となりますが、一方で多くの分類群が衰退し縄文時代後・晩期とは大きく植生が変化したと考えられます。また、14世紀頃以降ではニヨウマツ亜属が漸増し、18世紀初頭頃以降で優占します。こうした変化は人の森林への干渉とマツの植林の結果と考えられています。

このように花粉化石群から、古植生の地史的变化や人間と植物のかかわりをなどを明らかにすることができます。



縄文時代後・晩期層から産出した花粉化石（スケールは0.01 mm）

1.コナラ属アカガシ亜属 2.クリ属 3.ブドウ属 4.トチノキ属 5.ミズキ属

## 江戸時代の産業

市文化財保護審議会委員 寺 町 勲

江戸時代の村の様子を伝えている文書には多様なものがありますが、今回は、村明細帳を中心に産業の様子を探ってみましょう。

村明細帳は、村差出明細帳・村鑑・村柄様子書上帳などともいわれ、本市域でも、岸村の43点を初め各村に残されておりま

す。村明細帳は、それが作られた目的の違いや村の負担を少なくするための名主の作為などによって、その内容は様々ではありませんが、当時の村柄を教

えてくれる有力な史料であることに変わりありません。

1. 田畑の比率 新編式蔵風土記稿には、「水田は少く陸田の方多し（岸村）」とあり、横田村・三ツ木村・中藤村共に同様の記載があります。

では、その比率はどれ位だったのでしょうか。

文化13年岸村の村差出明細帳によりますと、本田分の田の面積は約5%、高は約7%となっており、天保9年三ツ木村御料の村差出帳によりますと、田の面積は約0.6%、高は約1.7%となっておりま

す。以下、正徳元年横田村の面積約34%、寛政11年中藤村御料の面積は2.6%となっており、これに新田分を加えると、田の比率はさらに大幅に下がるものと思われま

す。

2. 田畑の質 正徳元年横田村の反別指出シ帳には、「御年貢米谷田悪米二而御上米二不罷成先々より金納二而上納仕候事」とあり、寛延3年岸村の村鑑帳には、「此村田方天水場二而田畑共二早損場二御座候」「此村野方軽土之場二而肥元入多相懸り作徳少ク因窮仕候」とありま

す。また、他の多くの村明細帳にも同様の記載がみられます。

3. 肥料 寛政11年中藤村市郎右衛門組・佐兵衛組の品々御尋書上帳には、「肥之義、田方八木之葉・芝草等腐らがし、仕付前田之中え入、下肥二仕候而仕付申候。畑方之義は、木之葉・大麦から・芝草等腐らがし、下肥二仕、糠・灰相用候」とあり、文化13年岸村の村柄様子明細帳には、「田方肥、ほしか（干鰯）糟用申候」とありま

す。また、三ツ木村御料の断簡には、「田方肥は油粕を用ひ（中略）近村油絞り又は所沢引又川岸より買入申候」とありま

す。等茂少々宛作り申候」「田方種物は、稲草之名種尾張・餅は五郎兵衛多作り、畑方多作り候種物は、大麦しらば・こう坊・六角、小麦阿弥陀・白ひき、粟稔久蔵・餅白こぎ、稗やり穂・白ひゑ、胡麻黒胡麻」とあります。（なお、明治6年岸村の数目取調帳は、米17石3斗、大麦360石、小麦72石、大豆21石、粟226石、小豆9石6斗、稗48石、蕎麦25石、茶青葉250目、桑120駄、菜種5石、藍葉1,200貫目、蕨70貫目、木綿綿1,200反となっておりま

す。また、明治3年中藤村のものには、油・酒・漿・生糸などもみられます。）

5. 山林 寛政11年岸村の「品々御尋書上帳」には、「畑えは桑仕立申候、山林之義は多分松・雑木二而勿論土地相応仕候義二御座候。其外、榎・栗・杉等少々宛是迄有り候木品二御座候」とありま

す。また、御用木桐も植えられていたようです。

6. 農間余業 農間余業については、多くの村明細帳に記載してありますが、その一つを挙げてみますと、文政4年中藤村市郎右衛門組・佐兵衛組の村差出明細書上帳には、「農業之外、男は江戸表え炭を附出馬無之ものは縄くつ・草履・草鞋等渡世稼仕、女は蚕を飼、絹・青梅縞・木綿縞織出稼二仕候。」とありま

す。炭は、薪と共に青梅・五日市などで仕入れ、主として青梅街道を通過して江戸に運び、それを売った代金で、肥料にする糠・灰などを購入していたようです。中には、渡辺（平六）家のように大名屋敷に出入りした者もおりま

す。渡辺家には、紀州家に撰炭を納めていた通が残っておりま

す。それによりますと、2～3日置きに16～32俵、月に250俵から400俵もの炭を馬で運んだようですが、特に多いときは引又からの水運を利用したものと思われま